

不登校児に対する登校支援の一事例 ～インターネット・ゲーミング依存に対する援助～

○千葉 歩¹⁾ 大川 直樹¹⁾ 杉岡 良彦²⁾ 太田 健介²⁾
1) 看護師 2) 医師

医療法人耕仁会札幌太田病院 ストレスケア病棟

I. はじめに

昨今、インターネット依存が社会問題となっている。インターネット・ゲーミング依存が原因の不登校であるA氏に対して、どのような援助が効果的だったか検討し報告する。

II. 症例紹介と入院までの経過

A氏、15歳。インターネット・ゲーミング依存、不登校。13歳よりパソコンでインターネットゲームを開始。15歳になってからは、1日8時間程使用する等依存傾向となる。午前3時頃入眠し、10時頃起床するようになり、昼夜リズムも狂う。母親が0時以降のパソコンの使用を禁止にすると、易怒性が高まり、不登校日も増加した。パソコンをとりあげると、「パソコンを返してくれないなら死んだ方がましだ。」と投げやりになり、全く登校しなくなったため、当院を受診し、任意入院となった。

III. 入院治療中の援助と経過

1. インターネットゲームの使用不可
2. 生活リズムの改善：毎朝6時に起床し犬介在療法、ラジオ体操に参加した。23時までには就寝し、スケジュールに沿った生活を送り、昼夜リズムが改善した。
3. 内観療法：家族内観も実施した。終了時に「愛されてきたけど、依存症によってその幸せを忘れていた。自分が依存症だとわかった。パソコンを買ってから家族との距離ができていた。迷惑をかけていたことに気付いた。」と内省が認められた。
4. インターネット・ゲーミング依存の勉強会、社会生活技能訓練、ピアサポート、脱依存症の会、院内学校等に参加：「パソコンを手に入れてから無気力になっていた。学校に行きたい。」と参加後の感想用紙に記入している。
5. 登校支援：当院の不登校児への12段階登校支援システム¹⁾に沿い実施。登校時車内では、同伴スタッフが現状の問題点と将来への影響の説明を行なう等、内省的な関わりを実施した。

順調に登校、試験外泊がすすみ、入院から約1ヵ月半で長期外泊に至る。長期外泊1ヵ月後の受診時には、登校継続出来ており、ゲームもしていない。家族との会話も増え、母親は「以前よりも穏やかになった。」と述べている。

IV. 考察

インターネットが出来ない環境に身を置き、内観療法により自己客観視が出来るようになり、自分が周囲に愛され支えられながら、迷惑をかけ生きてきた事実気付いた。家族との信頼関係も修復し、家庭内での寂しさが解消され、自らの生活態度を変えていこうとする動機付けが出来たと考えられる。また、学習により具体的な疾患知識を得たこと、スタッフや他患者との交流の中で自信が持てたことで、投げやりな態度や発言も改善されていき、自律性を獲得していった。運動、アニマル療法、院内学校等で規則正しい生活がおくれるようになり、当院の12段階登校支援システムに沿った援助の効果もあり、インターネットゲームから離れ、登校が可能になったと考えられる。

1) 運動による体力の回復や院内学校での学習指導、学校との連絡や調整、スタッフによる同伴登校等、短期間で通学に導く登校支援システム